

日韓市民ネットワーク・なごや

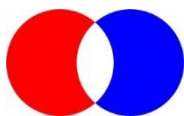
한일 시민 네트워크 · 나고야

会報 No. 70
2014-8-25

Home Page : <http://home.m00.itscom.net/nikkan/index.html>

発行 者 : 後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



紺青

目次

- | | |
|----------------------|-------------|
| P 1 事務局通信 | 統括幹事 : 後藤和晃 |
| P 3 行事案内 | 事務局 |
| P 5 高麗大との交流・参加者からの便り | |
| P 16 会員の広場 | 会員 |

事務局通信

사무국 통신

事務局統括幹事 後藤和晃

(1) 日本をこよなく愛した“水崎翁の墓守り”徐彰教さんの急逝を悼む！

6月26日の早朝、私は韓国・大邱市からの一報に大きな衝撃を受けました。大邱で、日本人水崎林太郎翁の墓地を敢然として守り抜いてきた、徐彰教（ソ・チャンギョ）さん、81才が前日の25日の正午前に、心臓麻痺で急逝されたというのです。日韓市民ネットの会員の皆さんなら、岐阜市出身の水崎林太郎翁が大正初期に大邱に移住し、日照りや洪水に苦しむ現地の農民のために、死力を尽くして6万坪にのぼる農業用の巨大な大貯水池、寿城池を実現し、「大邱農民の恩人」と称えられたことや、その水崎翁の墓を徐彰教さんの一族が、75年もの永きにわたって守り続けてきたことは、良くご存知のことでしょう。中には生前の徐さんと名古屋をはじめ、韓国各所で出会い、楽しく交流した記憶をお持ちの方も、おいでのはずですよ。



徐さんとは、4月の水崎翁の追慕祭の当日に病院で出会い、意気軒昂な姿を見たばかりでしたが、突然の死去との一報で、私は取るものも取りあえず、その日のうちに大邱に飛びました。

徐さんのご遺体は、国立慶北大学の病院内にある葬祭場に安置されていました。そこで私が目を見張ったのは、弔問に次々と訪れた多くの人たちが隣に設けられている会場で、一献、傾けながら、徐さんの思い出話に打ち込んでいる姿でした。聞けば韓国では「三日葬」が一般的で、亡くなったその日から、葬祭場を設けて弔問を受け始め、三日目の午前中に出棺するまで、弔問客への対応が続くのだそうです。弔問客の大半は、静かに杯を傾けながら、1～2時間徐さんとの思い出を語り合った後、遺族に挨拶して、引き上げて行きます。日本の葬儀がすっかり形式化し、例外なく30分程度で終わってしまうのに比べ、「さすが情の国といわれる韓国の葬儀だ。日本とは、ずい分違うな！」と思ったものでした。



徐彰教さんの葬儀の間に、私は「徐さんが直接、自分の耳で聞いたなら、さぞ喜んだらうな！」と感じた会話を、いろいろ耳にしました。次のような言葉のやりとりでした。「来年の追慕祭は、徐さんの気持ちを我々が受け継いで、今年以上に盛大にやりましょう！」「大邱の人たちで、理解し協力してくれる人は、けっこういますよ！」「水崎翁顕彰会の後援会長になっている米子市の佐田山有史さんは、来年も追慕祭を立派に開催して、徐先生を安心させなきゃ！と言っておられましたね」「これまで追慕祭に参加された福岡や神戸の市民の皆さん方からは、来年は徐彰教さんの墓参りも兼ねて、必ず追慕祭に参加しますとのメッセージを送ってきていますよ！」等々。

私もまた、“来年4月の追慕祭には名古屋周辺の仲間と共に、必ず大邱を訪れ、水崎林太郎翁と徐彰教さんの双方を追慕しよう”と心に決めました。



会員の皆さんも、ぜひ、ご同行下さい!!

(2)“高麗大訪問団” 交流の熱気残して帰国 ～ 7月11日～16日 ～

この夏、韓国の名門大学高麗大学の教育学部が、3回目となる訪問団（学部長以下 17 人）を送ってきてくれました。世間的には日韓両国政府が冷戦状態の中、民間交流も湿り勝ちの有様でしたが、訪問団と私たちとの交流は、これまで通り熱気に包まれて終始しました。交流のプログラムを下記でご確認下さい。

- 7月11日（金）訪問団到着 ～ 韓国学校でホストと会いホームステイ
 - 12日（土）ホストと自由行動 ～ 訪問団・ホストら 会員会食
 - 13日（日）バスで奈良へ ～ 石上神宮・箸墓古墳・法隆寺ら ～ ユースホテル泊
 - 14日（月）平城京跡・朱雀門等・興福寺・東大寺大極殿ら ～ 名古屋ホテル泊
 - 15日（火）訪問団 名大教育学部生と交流
 - 16日（水）訪問団 午前自由行動 ～ 午後 帰国
- ※ 11日から13日まで教授や一部の学生が名大での学会に出席

今回、高麗大の訪問団を招請するのに際しては、会員や協力者の皆さん方に、寄付のお願いをした所、本当にたくさんのお金を送って頂きました。匿名の方々含め、ご協力いただいた内容を公開し領収書の発行に代えさせていただきます。なお、万一、お名前が抜けてしまった方は事務局まで、ご連絡下さい。次号で掲載します。

*** 寄付者一覧 ***

	匿名 希望	100,000	鶴飼 満	5,000	匿名 希望	10,000	松尾 博雄口	5,000
協力者	鄭 禧昇	100,000	大嶋 明	5,000	柴田日出子	2,000	三尾 和廣	5,000
会 員	浅井 郷士	3,000	大島 康彦	5,000	田口 良浩	5,000	三輪 優	5,000
	石川 末雄	5,000	太田 道子	3,000	土田 隆夫	2,000	森田 邦春	3,000
	伊藤 廣枝	2,000	小坂井多恵子	3,000	長澤 進	10,000	安田 守	5,000
	伊藤 義郎	3,000	匿名 希望	20,000	二日市 壮	5,000	山田あき子	3,000
	井上 靖代	2,000	堺澤 一生	3,000	韓 一星	10,000	山本 玲子	3,000

会計報告	収入	寄付金など	332,600	支出	マイクロバス関連費	86,913	差引残高
		ETC カード	10,000		旅行中の飲食代	70,066	
		(松田哲育氏提供)			宿泊費(日本人のみ)	26,595	
					交歓会の支援など	30,582	
					寺社入場料など	23,400	
		計	342,600		計	237,556	105,044

ごらんの通り、今回はお二人の方が大金 10 万円の寄付をされました。一方で高麗大から「奈良での自分たちの宿泊代は、大学で負担します」との申し出があり、結果として、10 万円もの残金が生じました。せっかく残った尊いお金なので、韓国の留学生との交流（11/1）に使わせていただくつもりです。ありがとうございました。

なお、高麗大の来訪をめぐって、日韓双方の関係者が綴った感想文は、5 ページ以降に掲載しました。

行事のご案内 행사안내

(1) 日韓交流大野遊会にお出かけを！

秋も深まりを見せる 11 月の初めに、犬山市に残る大自然“八曾の森”で、日韓の学生・市民が集って、韓国の秋を楽しむ風習＝野遊会を行います。当日は、滝や溪谷の風景を賞でながら山歩きをし、その後は、バーベキューやいも煮で秋の味を楽しみながら交流を深めます。日程は次の通りです。

日 時 11 月 1 日（土）9：30～14：30

場 所 犬山市 八曾自然林・もみの木キャンプ場

参加費 留学生 500 円 ・ 日本人学生 1000 円 ・ 成人 3000 円

申込み * 学生・留学生は会の学生部 鈴木健介君と石田樹梨さんへ

* 成人 会事務局 後藤和晃（TEL・FAX0587-56-6788）まで FAX にて

会場への行き方 * 学生・留学生（総計 28 人程度）は朝 8：15 に名大に集合

マイクロバス搭乗

* 成人 11：00 までに名鉄小牧線の羽黒駅に集合・マイクロバス搭乗

※ 名鉄タクシー（0587-56-4545）10 分ほどで来ます

* キャンプ場までマイカー直行も可ですが、飲酒はできません！

学生・留学生らの健脚組の山歩きは、10：00 スタートで考えています。もみの木キャンプ場にマイカーで直行する人、及び名鉄羽黒駅から名鉄タクシー（0587-56-4545）でもみの木まで行く人のうち、脚に自信のある方々は 10：00 スタートの山歩きに間に合うようにして、ご参加下さい。

当日は、台風もしくは台風なみの低気圧でない限り、雨模様でも実施します。バーベキューを行う場所は、トタン屋根で覆われた建物の中なので、かなりの雨でも支障はありません。



(2) 9月に中国・山東半島の歴史を訪ねます ～日韓交流史フォーラム～

私たちの会員が中心になって、2000年の日韓交流史を学んでいるグループ“日韓交流史フォーラム”は講座と現地（韓国各地や高句麗・渤海の故地である旧満州）への歴史を学ぶ旅を過去5年にわたって展開してきました。6年目にあたる今年は、9月15日から5日間、韓半島に向けて大きな羽をつき出しているような形の中国・山東半島を旅します。

旅行の背景には、大中国を源とする様々な文化ばかりか、半島を故郷とする人間集団までが韓半島を経由して日本に渡来してきたことが想定され始めたことがあります。少し具体的に言えば、揚子江流域で育まれた稲作の技術や山岳信仰、道教、仏教など心の世界の情報も、ここから韓半島に渡り、一衣帯水の日本に伝わります。また、山東半島の中央部から大量に出土した人骨の頭がい骨の形が山口県土井ヶ浜で発見された集団の頭がい骨にウリふたつであることから、山東半島から集団で移住してきた人々がいた可能性も指摘され始めています。

参加者は20人で同行解説は元日本考古学会会長の西谷正先生です。行程は次の通りです。

主催：日韓交流史フォーラム					後援：名古屋国際センター	
No	月 日	都 市	交 通	時 間	主 要 旅 程	食 事
1	2014 年	名古屋		7:00	中部国際空港 3階 国際線出発ロビー集合	
			MU 744	9:00	中部国際空港発	朝（機内軽食）
	9/15	青 島		10:50	中国・青島国際空港着（1時間の時差が有ります）	昼（ ○ ）
	（月）	青 州	専用車		昼食後、（済青高速経由 200km 約3時間）青州へ	夜（ ○ ）
		臨			青州市博物館 見学後、臨 へ（60km 約1時間）	
宿泊：万豪大酒店						
2		臨	専用車		斉国古城遺跡博物館 及び 城郭遺跡	朝（ホテル）
	9/16	章 丘			章丘へ（80km 90分）城子崖遺跡 ～ 済南へ（60km）	昼（ ○ ）
	（火）	済 南			山東省博物館 ～ 千仏山：興国禅寺と千国崖仏像	夜（ ○ ）
					宿泊：済南貴都大酒店	
3		済 南	専用車		蓬萊へ（420km 約5時間半）	朝（ホテル）
	9/17	蓬 萊			蓬萊閣 と 蓬萊水城 ～ 煙台へ（90km 90分）	昼（ ○ ）
	（水）	煙 台			博物館	夜（ ○ ）
					宿泊：煙台ラマダブラザ	
4		煙 台	専用車		威海へ（80km 90分）	朝（ホテル）
	9/18	威 海			往復フェリーで 清の北洋水師提督府である 劉公島	昼（ ○ ）
	（木）	石 島			その後 石島へ（80km 約2時間） 赤山法華院	夜（ ○ ）
					宿泊：石島賓館	
5		石 島	専用車		青島へ（270km 約4時間半）	朝（ホテル）
	9/19	青 島	MU 743	17:35	青島国際空港発	昼（ ○ ）
	（金）	名古屋		20:50	中部国際空港着、解散	夜（機内軽食）

行程の4日目には、九世紀東アジアの海上王といわれた新羅人豪商 張保皋（チャン ボコ）の基地の一つで比叡山延暦寺の三代座生“円仁”ゆかりの赤山禅院も訪ねます。張保皋と彼の部下たちは、天台密教の奥義を求めて入唐した円仁が、書類の不備から日本に送還されそうになった折、赤山禅院にかくまい、粘り強く円仁の求法の旅を成就させるのです。

また今回巡る地域は、明治いらい近代国家となった日本が大陸進出を意図した結果、中国軍や列強とたびたび砲火を交した歴史の舞台です。今回の旅行は東アジア日中韓3ヶ国の交流史を深く学ぶことにより、これからの3ヶ国の絆を強めて行くための足がかりを考えるきっかけになれば、と考えています。

(3) 8月30日(土)に予定した講演は中止します！

年度当初、8月30日に「堤岩里教会に通い続けて」という講演を予定していましたが、講師の都合で、中止となりました。よろしくご了解下さい。

(4)第 37 回韓日歴史・文化フォーラム

『植民地時代における考古学的調査について』

－ 何がおこなわれたのか、何が問題なのか －

朝鮮半島における近代的な考古学的調査研究は、1900年に東京帝国大学の八木槇三郎の調査から始まり、1909年から1945年にかけては韓国統監府と朝鮮総督府の主管により、朝鮮半島各地の古蹟調査及び保存事業が行われた。こうした植民地朝鮮における日本人の調査活動に対する評価は、日韓両国によって大きく異なる。日本人研究者たちは「日本人の古蹟調査事業は、朝鮮半島の古蹟の実態を明らかにし、それを保存する役割を果たした」と主張した。一方、韓国の研究者は「日本人の古蹟調査事業は、朝鮮民族の文化財の破壊・略奪であり、その成果は植民地支配の正当化のために用いられた」と主張してきた。近年、日本と韓国において、当時の調査研究にまつわる資料の検討や、新聞記事などこれまで十分に利用されなかった資料も用いられ調査研究の実態の検証が進みつつある。そこで今回は、京都大学大学院文学研究科教授・吉井秀夫氏をお迎えし、植民地時代の考古学的調査で何が行われて、何が問題となったのかをお話していただきます。

講 師：吉井 秀夫氏 京都大学大学院文学研究科 教授

専門は、朝鮮の三国時代を中心とする朝鮮考古学研究

日 時：9月10日（水）18：00～

場 所：愛知韓国人会館 5階大ホール 〒453-0013 名古屋市中村区亀島1-6-2

参加費：500円

地下鉄東山「亀島」駅 ③出口徒歩1分

主 催：韓日歴史・文化フォーラム 後 援：在外同胞財団・駐名古屋大韓民国総領事館
名古屋日韓親善協会

お問合せ・お申込：韓日歴史・文化フォーラム事務局（民団愛知内） 金 栄一（キム・ヨンイル）

TEL:052-452-6431 FAX:052-452-1716 E-mail:[jigyo アットマーク mindan-aichi.org](mailto:jigyo@mindan-aichi.org)

高麗大との交流・参加者からの便り

日本の中の韓国を見る

大学院 一般社会教育専攻 ソン・ジヒョン

こんにちは。高麗大学校のソン・ジヒョンです。
7月11日から16日まで、日本の名古屋と奈良を訪問しました。私はどちらも行ったことがあるのですが、私にとって今回の教育現場調査はとても新しい経験でした。最近、韓国と日本の外交的摩擦の問題もありますが、やはり行ってよかったと思います。

私は高校生の頃、埼玉県でホームステイを経験したことがあります。これがきっかけで日本語の勉強を始め、何度か日本を旅行したこともあります。どうすれば、この経験が、とてつもない変化をもたらすのではないかと考えています。そして、数年ぶりに名古屋でホームステイを経験することになり、私の人生にまた違う変化をもたらすかもしれません。初めてでないにもかかわらず、違う国の見知らぬ家で過ごすことで、色んな意味で緊張感がありました。しかし、ホストファミリーの姿を見て、「家族」の温かさを感じました。私に見せてくれた配慮と温かさもそうですが、ご家族の皆さんも健康そのもので、私も元気になったような気がしました。この元気を日本の皆様に伝えたいですし、この思いが広く伝わり、韓日関係が円満に続くことを願っています。

私は、日本で韓国を見ました。韓半島から渡った渡来人たちは、日本で多くの業績を残し、日本人たちはこれを発展させて素晴らしい文化を築きました。

特に、子供のころ教科書で見た奈良・法隆寺の壁画と東大寺の大仏を間近で見ることが出来て、言葉では表現出来ないくらい感動しました。

韓日市民ネットワーク・なごやの会員の皆様との交流は本当に楽しくて、感謝の気持ちもありますが、私にとっては反省の時間でもありました。韓国語の教育や韓国語の交流に積極的に取り組む姿を見て、韓日関係が悪化することを心配し何の行動も起こさなかった私が恥ずかしくなりました。韓国にもこのような活動をする団体があれば、参加したいと思いました。

また、名古屋大学教育学部の大学院生とのセミナーは、1つの刺激となりました。この夏が終わると、論文の学期が始まります。いつからか繰り返される大学院生活にうんざりする私に比べ、熱意みなぎる姿を見ると私も頑張らなければなりません。ユルゲン・ハーバーマスの意思疎通行為理論を適用した教育を用いた教育を通じた偏見解消を研究の主題としているが、今回の教育現場調査は私の研究に大きな滋養分となったと自負しています。何だかんだ言っても、韓国と日本は今後も共存していかないとはいえないと思っています。しかし、癒えない傷がありますし、過ちもあります。「相生」共に生きるということです。共に生きていくために、私たちが今何をすべきなのかをもう一度考える時です。

教育現場調査は、私に初めて日本を訪問する機会を与えてくれた。近くて遠い国という認識の日本は、どんな姿なのか。最近、韓日関係が大きくも小さい雑音によって緊張感が増している。この時点での訪問は、何を意味するのだろうか？韓日関係と同様の複雑さを持つドイツとフランスも、40年以上続いた民間交流協力で共同歴史教科書を出版するという功績を実現した。私たちも韓日、あるいは東アジア的観点で歴史的な紛争を封じ込め、歴史認識と韓流文化の共有の土台を広げることがとても重要な課題として残った。このような状況で日本を訪問し、奈良の遺跡を見学することは特別な意味がある。

出発当日は台風接近のため、出発出来るかどうか心配された。しかし、空も手伝ってくれたおかげか、そんな心配もよそに綺麗な青空の下の名古屋に到着した。初日は、名古屋韓国学校を訪問した。この学校の設立趣旨は、在日同胞の後世たちに韓国人としての生態系を維持し、ハングルを伝えるためだった。しかし、現在の成人学生の殆どが日本人で、2000年代から始まった韓流文化によって韓国に対する関心が深まったためだと言う。この雰囲気は、ホームステイを通じてより深く実感することになった。私のホストは、服田次代さんという60代の女性。服田先生はとても明るく活力あふれる方で、韓流への愛情は格別だ。また、紹介して下さったお友達の方も韓国に興味をお持ちで、少女時代の曲を聞かせてくれたり、ソウルの地図や地下鉄路線図を出して私が住んでいる所に赤ペンで丸をつける様子は今でも目に焼きついている。お互い言葉があまり話せず心配だったけれど、表情や身振り手振りで気持ちは通じたので、友情を築くのには不便さは感じなかった。私たちは翌日、現存する日本最古の木造建築物で国宝の犬山城へ行った。

川沿いの丘の上に建つ城は、名城に相応しい古風な雰囲気を醸し出している。靴を脱いで入ってみると、最上階まで上るのが容易ではない。階段の角度が急で、服田さんが心配されたが、終始明るい笑顔で私を励ま

してくれた。犬山城へは後藤さんも同行したのだけど、犬山城にまつわる歴史の話に私は興味津々で、昼食の時も終わる事はなかった。印象的だったのは、服田先生の美しい音色でノ・サヨンの「マンナム(出会い)」やキム・ジョンファンの「愛のために」歌ってくれたこと。何かしらの連帯感が生まれて目頭が熱くなった。お寺に移動して仏様にお辞儀をし、韓日関係から協力と関心が夜深まり、いかなる政治状況でもお互い理解し交流が発展するよう祈った。

今回のホームステイで最も感じられたのは、一生懸命勉強して努力する服田さんと後藤さんの姿だった。私よりも韓国のことをご存知で関心を持つ服田さんと後藤さんを見ていると、むしろ私自身が反省しなければならぬ。韓日市民ネットワーク・なごやと服田さん、後藤さんに心から感謝の気持ちを伝えたい

3日目と4日目、私たちは奈良へ移動し遺跡を探访した。日本の歴史上で最初の女王である卑弥呼の墓を見学することから始まり、高句麗時代の僧侶が描いた金堂壁画が有名な法隆寺も見学した。教科書でしか見たことのない五重塔と金堂に直接対面したときは、まるで生きているかのようで活き活きした感じだった。そして東大寺の大仏は、思い出すだけでも鳥肌が立つくらい痛烈に記憶に残っている。特に東大寺を訪問したときは、後藤先生のご厚意で特別待遇を受けることが出来た。関係者以外は入れない横道を歩いてみると、消失する前の東大寺の大きさが分かる土地の境界線を確認することが出来た。そして、東大寺の大仏の前でお香を焚いてお参りをしたのだけど、大仏の雄大さと物々しさが私だけでなく周りの全ての人を圧倒するだけの力を持っていた。そして、ガイドをして下さった在日同胞の先生も感動と興奮を隠せず涙を隠せずにいた。東大寺の大仏は世界最大のものだという。高さ15m、顔の大きさ5m、重さ380tだというのが、この大仏を作るために動員された工夫の数は260万名とも言われ、まさに世界最高と言えるだろう。大仏の下に装飾された蓮の葉だけを見ても普通の人の背丈よりも大きく、蓮の葉に触れるだけでも厳かな雰囲気が胸に響いてくる。

名古屋に戻り、最後の公式行事として名古屋大学を訪問した。名大の中で色々見て回るのは本当に面白い。特に図書館が印象に残っている。より規模の大きい膨大な資料、惜しみない行政の支援、図書館の静粛な雰囲気、綺麗な雰囲気など全てが完璧だと思った。

探访を終えて合同セミナーが始まり、大学ごとに発表が行われた。この時の発表に対する質問と討論は、時間を忘れるほど集中していた。このセミナーを通じ、相手への真摯な関心、知識の共有の領域を広げられる、意義深い時間だった。続く会食では、確認出来なかった質問を回答を交わしながら知的好奇心を刺激し、お互いの学問的関心を広げる成長の契機になった。



5泊6日の日程はハードだったけれど、第4次現場調査を通じ、韓日関係において既存の観点だけでなく多国的観点、進んで日本の観点から眺められた特別な機会だった。また、これをきっかけに両国の相互理解と協力に一役買えたと思うと胸が一杯だ。海外教育調査が始まって13年が過ぎた。

初めての日本、嬉しい出会い

私はカナダ・バンクーバーでの語学研修の期間中、多くの日本人の友達と会い、日本に対し大きな関心を持っていました。今回の海外教育現場調査を通じて日本の文化と教育現場を体験してみたかったのです。

今回のスケジュールで最も目に付いた活動は、ホームステイでした。ホームステイは、彼らの文化を直接感じて体験することが出来る、またとない良い機会だったからです。バンクーバーで日本の友達と生活していただけに、とても楽しみにしていました。期待したとおり、日本の家族の皆さんは本当に親切でした。私のホームステイホストは、大学2年生の「ソマダ・レイ（杉田玲衣）」さんでした。レイさんとお父さん・お母さん・弟と妹の5人家族。ご家族も、私のために色々と準備して下さいました。日本の伝統料理など美味しいものを頂いたり、生まれて初めて着物を着て花火をしたり、名古屋城を見学したりと楽しい時間を過ごすことが出来ました。ご家族の皆さんが私のために演奏までしてくれましたし、お別れの日にはお土産も沢山持たせてくれました。1泊2日という短い時間でしたが、彼らの文化を直接感じる事が出来ましたし、ご家族の温かいお気遣いが本当に嬉しかったです。言葉では表現出来ないくらい、感謝しています。

3日目・4日目は奈良を訪れ、沢山の史跡を見学しました。現在韓国史を勉強していて、歴史的遺物に興味があるのですが、日本の遺物を直接見て体験出来て良かったです。三国時代の遺物を見るとその国々に特徴があり、建築物にもそれぞれ違いが見られますが、奈良に現存するお寺を見ると百済の雰囲気が残っているようでより記憶に残りました。色々なお寺や塔、建物を見てみると、日本の建物と韓国の建物の違いが見えました。韓国の建物は赤・緑・青など鮮やかな色が目立ちますが、日本の建物は黒・茶色・白など暗い色が目立ちます。厳かで強健な雰囲気が良いですね。また、奈良公園の鹿も可愛くて、これも記憶に残っています。



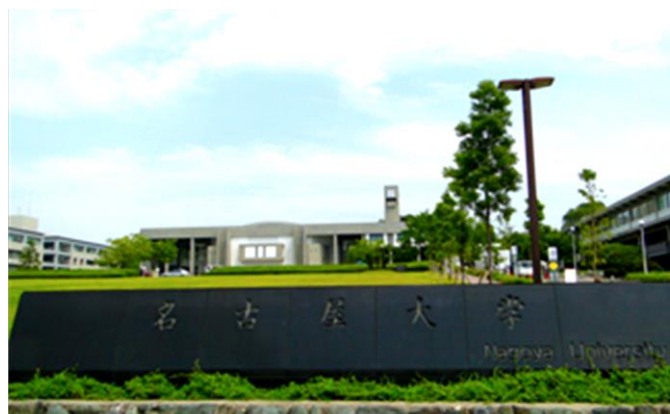
今こそ韓日関係を成熟させ、発展させる時だ。次の現場調査がかなうのなら、また日本の大学から我が高麗大学校を訪問してくれば、人情深く濃密な韓日関係の反映と発展、そして平和に寄与することが出来るだろう。私はそう願っている。

大学院 コンピューター教育 チ・ウネ



最後の思い出は名古屋大学です。まず私たちは名古屋大学附属中学・高校を訪問し、子供たちがどのように教育されているか、学校がどのように運営されているかを体験しました。日本の教育環境は韓国の教育環境と似ていますが、違いもありました。韓国では主に一方的な注入式教育が行われている反面、日本では子供たちが直接参加して討論し、子供たちを中心とした教育が行われていました。韓国でもこのような教育方式に変わるよう努力していますが、もう少し時間が必要です。やがて私が教師になったとき、このような教育方式で授業が出来ればと思いました。最後に私たちは、名古屋大学の学生と一緒にセミナーを行いました。内容が難しく分かりにくい部分もありましたが、彼らと懇談会で交流することも出来て意義深い時間を過ごすことが出来ました。

今回、行きたいと思っていた日本を初めて訪問することが出来て本当に嬉しかったです。そして、一生忘れられない、貴重な経験になりました。



今回で2回目の名古屋訪問。最初は今年の春だった。名古屋大学の招待プログラムに選抜されたおかげだ。名古屋に着いた翌日、私は夢を見た。赤い鯉が池で跳ね上がりながら、船に跳び上がってくるようすがとても眩しかった。尻尾には、イギリス女王が王冠の模様を装飾していた。ちょっと不思議な夢だったが、起きた後も鮮明で夢見心地の気分だった。この日、名古屋城を見学した。お城の中に、金の鯉がいたのだった。ここで記念撮影をして、偶然の一致を感じた。しかし、韓国に帰って名古屋城に纏わる話を読んでみると、名古屋城の屋根の両端に装飾されている金鯉には大きな意味があることが分かった。私の前世は名古屋に住んでいたことがあるのだろうか？

私の母は子供のころ、7歳の時から11歳の時まで愛知県大府町(現・大府市)に住んでいたことがある。みかんの木が多く育ち、簡易飛行場があり、第4国民学校に通っていたという。母に日本での話を伝えると、岩手県のとある新聞社に勤務する人がはるばるその学校を訪れると、建物はなくなって名前も変わり、松の木が生い茂っていると伝えてくれた。母は1946年春、よもぎが青々と芽生えるころに帰国した。祖父は人を沢山雇って自転車屋を経営し、物には恵まれていたので戦時中で物資が乏しいときでも高級な靴や服、食べ物の恩恵を受けていた。いつも毛織のサンダルを履いていたので、わらじや下駄を履く子供たちが羨ましくて、遠足に行くときもこっそり他人の下駄をはき、それに驚いた祖母があわてて靴を持ってきて履き替えたと言うエピソードがある。いつも出される牛肉の煮付けにうんざりし、むしろ日の丸弁当が食べたかったと話す。そんな母の思い出の地だからだろうか。名古屋の町はまるで私の故郷のように柔らかに接してくれた。名古屋駅のデパートも、外が見えてあつという間に上がっていくエレベーターの思い出があるところだ。そこでお土産用のハンカチを買い、母の思い出とオーバーラップする気分だった。

今回の訪問は、名古屋大学で開催される日本比較教育学会創立50周年記念学術大会に私たちの大学チームが共同で発表し、現状調査も行う目的で実現した。初回の訪問時に比べると、行く前から準備も複雑で、到着してからの日程もタイトだった。韓国学校も訪問したが、正式な学校ではなく各種学校であることが分かった。校長先生と他の先生方が与えられた環境で最善を尽くして教育する熱意が感じられた。お忙しい中、お茶やお菓子まで用意して下さって、ただただ感謝するばかりだった。この後、ホームステイホストと会う時間になったのだけど、私はホームステイをしない。それでも、日本の方々にお会いすることが出来て本当に良かった。特に、後藤さんがメインになって取り計らってくれたので本当にありがたかった。後で学生たちに聞くと、ホストの皆さんは本当に親切で、美味しい食事を沢山用意してくれて日本に対する先入観が無

くなり、いい思い出が沢山出来たと話していた。2日目は、教授をはじめとする先生方が発表した。その翌日が私たちのチームの発表で、内容を考えていたら緊張してしまった。日本のチームが発表するときの言葉が速く、これには驚いた。やはり、言葉は現地で練習しなければならないと実感する契機となった。教授と鳥先生の発表が無事に終わり、参加者が集っての懇親会が行われた。名古屋名物のひつまぶし、きしめん、味噌カツ、寿司など美味しい料理とお酒、ビール、ワイン、お茶を頂きながら談笑していた。3日目は私たちのチームの発表だった。緊張はしたけれど、参加者もさほど多くなく、発表は無事終了した。質問を2つ受けたが、日本語が流暢なチョ先生がしっかり答えてくれた。発表が終わってすぐ、私たち一行は急いで奈良ユースホテルで待っていた現場調査チームと合流した。この日は遅くまでお酒を飲みながら、後藤さんを含む5名の日本人と合流。自己紹介もして、楽しく過ごすことが出来た。

翌日は、奈良の各地に存在する遺跡を見学した。一番印象に残ったのは、奈良公園の鹿だった。日本には何度も来ているが、奈良県は初めてだった。鹿が私の鞆に噛み付いたり、突進してくるので驚いた。元々臆病な私は、鹿は純粋な動物だと思っていただけにひどい目に遭うところだった。写真も沢山撮り、子供に戻ったかのように楽しく遊ぶことが出来た。東大寺の大仏も、印象的だった。製作過程で多くの人が犠牲になったと聞いて、突然万里の長城を思い出した。やがて後代のが見られる多くの遺物は、全てが誰かのたゆまぬ努力によって作られたと思うと胸を打たれる。遺跡を回るときも、2人のガイドさんが一生懸命説明してくれた。汗をかきながらも若い私たちのために気遣ってくれる様子に感動した。

この翌日は、名古屋大学を訪問した。案内してくれた先生は、英語がお上手で親切で、よくいる日本の女性とは違う活発な性格の持ち主。とても楽しい訪問となった。図書室を見学したほか、名古屋大学の誇りである「ノーベル賞記念館」にも行き、多くの科学者の業績を写真に収めた。「韓国にもノーベル賞受賞者がもっといればいいのに」と思いつつ、我が国の若い科学者たちに期待してみる。5泊6日の日程は、あつという間に過ぎてしまった。韓日関係がどうあれ、私たちは引き続き良い関係を築き上げ、お互い学ぶところは学んで知恵を出しながら暮らして行きたいと思いつつ、この文の結びとしたい。ありがとう名古屋～！



日本語は話せないけれど、日本語で自己紹介するときに必ず伝えていたことがある。「日本は初めてです。」日本に行くのは初めてで、ホームステイも初めてだった。その日本に大勢で行く旅行だったので、実は出発前はかなり不安だったことをまずはお話しておこう。また、歴史を学ぶ学生として、日本に対し若干の先入観があったことも事実だ。けれども新しいところ、初めて行くところへの旅情は、その人がその土地に対して持っている誤解を正す役割もあるようだ。私にとっては、今回の海外教育現場調査が日本に対する私の無知に起因する考えや先入観を正すきっかけになった。

私のホームステイホスト・浜田万莉奈さんは、韓国語が上手に話せる友達だった。日本語が話せない私にとっては最高のガイドであり、通訳もしてくれたお陰で不便さは全く感じられなかった。1泊2日のホームステイと全体の交流会を終え、ホテルの前で別れを躊躇していたことで、お互いに初めてだった経験が深い記憶と友情を残してくれたことを確認した。ぎこちなかった最初の出会ってから、2人で歩いた名古屋の名所の数々、コメダで時間が過ぎるのを忘れて交わした話まで。同行しながらその1日を貴重なものにしてくれた万里奈の姿は、一緒に撮ったプリクラと共に長く保管しておかなければ。

名古屋のホームステイホストと共に過ごした名古屋での交流活動。それ以降は、奈良への文化探訪が予定されていた。本だけで学ぶ歴史と、その歴史の現場をこの目で見て感じることは私にとってはいつも楽しみでワクワクするものだ。そのワクワク感を、奈良で味わった。「古代韓国と日本の交流」という小題目の下に必ず登場する法隆寺の百済観音菩薩像、東大寺の大仏、そして前方後円墳。このような遺物を何年か前に教育実習をしながらも実際に見ないまま教えていたことがとても恥ずかしかったけれど、世界史に載っていた遺跡を見た瞬間の何ともいえない感じは忘れられない。

奈良の遺跡を見て感じたことは、今まで私は東アジアの歴史を韓国を中心として見渡す東アジア史を勉強していたということだ。今回の現場調査では、遺跡を見学しながらその中心点を変え、東アジアの歴史を日本から眺める東アジア的な姿と考えることが出来た。焦点を変えて眺めた結果、私たちが見過ごしていることや何気なく単純化していることが見えた。今まで私は小さな漏斗を通じて見つめながら全て理解したと思っていたが、それは間違いだった。韓国と日本を「東アジア」というより、広い脈絡の中で見つめようとするれば、私たちの狭い枠から抜け出して他の国家の観点と外国人の目で見れば過去をより客観的に見ることが

出来るし、これを通じてその中で共に生きてきた過去の様子を鮮やかに蘇らせられることに気づいた。

名古屋大学の合同セミナーと交流も新しい経験だった。外国の学生の発表を聞いて討論をし、その後の交流会でお互いの関心事や研究について話すのが楽しかったということは単純に年齢が近いし、勉強している学生だからという理由だけではないようだ。短い時間ではあったけれど、直接向き合って意見を交わしながら少しずつ理解していこうとしているからではないだろう。

教授のご挨拶のように、韓国と日本は決して無関心のまま向き合うものではないと思う。歴史的にもそうだし、現在も政治・経済・文化的に両国は密接に繋がっている。ただ、両国の政治状況によって環形の良し悪しがはっきりすると思う。「東アジアの平和」という壮大な目標は、一個人が持っている先入観を捨て、相手の国に対する無知を悟り、交流を通じて思いを交わしながら理解しようと努力する漸進的な過程を通じて叶えていけるものと期待している。抽象的な目標だけど、事実個人一人ひとりの小さな努力から始まり叶えられることは、私たちも知らないうちに近づくことをためらうことだけでも変われば十分相互理解の出発点に立つことが出来る、その証になると信じている。

5泊6日、短くて短い旅程だったけれど、私にとっては日本に対する認識を変えてくれた、人生の重要な期間だったと思う。研究者の卵として第一歩を踏み出そうとしている今、このような機会に恵まれたのは本当に幸せだったと思う。この経験無くして東アジアの歴史を引き続き勉強していたら、多分私は小さな認識の間に止まっていただろう。



幼い頃から 幼い頃から海外の文化に興味があった私にとって、それは小さな夢だった。パスポートに色々な国のスタンプを押すことだ。初めての海外旅行は中学2年の時のこと。ボーイスカウトから海外文化交流で日本行くと聞いてすぐに参加を決め、大阪へ行くことになった。こうして初めて行った日本と言う国は、中2の私に多くを感じさせ経験させてくれた。美味しい料理や綺麗な町並みもそうだけど、本当に驚いたのは待ち行く人たちの態度だった。色々なお願いにも嫌な顔1つせず終始一貫にこっと笑って対応する姿を見て、本心ではないのではないかという疑問を抱くようになった。しかし、人に危害を与えるなどと言う教育が叩き込まれ、それが1つの文化として根付いているのだと納得したものだった。

今回の海外教育現場調査も、毎日確認していた教育大学院のホームページを見て即座に申し込んだ。旅行の醍醐味は、新しい出会いと見知らぬ場所でのコミュニケーションにある。旅行当日、出国審査を受け、飛行機に乗り込んで名古屋空港へ向け飛び立った。2時間半のフライトで、この旅行で何を勉強すべきかを考えながら到着した。最初に訪問したのは、名古屋韓国学校だ。芝生のコートが入口にあるこの学校は、家族のような雰囲気を感じた。長旅で疲れている私たちに、校長先生が麦茶を用意して迎えてくれた。中に入り、韓国の子供たちが日本でどのように教育を受けているかという説明を聞いた。子供たちは日本で生活をして、まださほど時間は経っていないが、韓国の文化に関する教育を受けてきたと言う説明を聞き、より良い支援を受けられればと思った。

その後この旅行のハイライトであるホームステイホストと会うとの話を聞いて、内心心配だった。ホストは70代の方だった。何よりも日本語が話せない私が会話出来るのかということが心配だった。そんな中、ホストが到着して挨拶した。鈴木幸之助さん。温かな笑顔と短い韓国語で挨拶を交わした。英語が話せると聞いて、正直安心した。学校で数学を教えておられて、校長もされたと話してくれた。私の父と似た経験をお持ちで、その話を聞いて気持ちが楽になった。このような短い挨拶を交わしてどこかへ移動した。彼の息子さんが来るということだった、しばらくすると、外車が1台到着し、気持ちよく挨拶を交わした。家に行く前に食事しようと言うので、ご一緒することにした。「刺身は食べれるか？」と聞か

れ、「好きだけど高くて滅多に食べられない」と返事すると、「沢山食べなさい」と言われ、緊張が解けた。こうして食事を終え、鈴木さんの家へ移動した。都心から離れたところにあるが、静かで趣のあるところだ。日本の畳の上でお話をしながら、夜は更けていった。

2日目。鈴木さんは朝早くから朝食を用意してくれた。素朴であっさりした味の和朝食を頂いて、近くの神社に移動した。15年前に亡くなられた奥様が眠る場所だと言い、強い気持ちで奥様に挨拶して名古屋城方面に向かう。この神社はとても広く、静かな森に包まれていて暑さを忘れてしまう。町内ごとに神社があり、日本人の多くは神様を信じていると聞いた。

3日目はバスに乗って奈良へ異動した。道中、奈良時代の王宮があった遺跡で日本の政治、経済、文化の中心であった平城宮跡、世界文化遺産の法隆寺を巡り、百済文化がどのようにして根付いたかの説明を聞きながら奈良での1日が終わった。4日目には東大寺を見学し、大仏殿に入ってみた。そこには、とてつもなく大きい大仏が誇らしげに鎮座していた。高さ16メートル、重さ380トン、顔の長さだけで5メートルにも及ぶ。日本各地から銅500トンを集め、8回の鑄造を経て26年間かけて製造されたが、元々は440kgの金をまとっていたと言う。各地を回り、説明を聞いて驚いたのは、過去に百済時代の文化的援助を受けたことを素直に受け止め、その文化を守って発展させるのは日本人の力だと説明されたことだった。その説明からは誇りが感じられた。

5泊6日の短い時間を通じ、韓国と日本がどれだけ密接な関係にあるか、違いがあるのかを学ぶことが出来た。学校を見学して韓国の教育とどう違うのか、どこを改めなければならないかを学び、学生が真に望む授業は何かと言う質問も投げかけてみた。新しい出会いもあったし、旅行を通じ自らを成長させ教師になるという夢に自信が持てる海外教育現場調査になった。



仁川国際空港を出発後、2時間ほどで名古屋・中部国際空港に到着した。電車で名古屋市内に移動する間景色を眺めていると、韓国の田舎の風景と似ているけれど、日本語で書かれている看板を見ると私は今日本にいますと実感させられる。名古屋市に着いてホテルに荷物を置き、その足で名古屋韓国学校に向かった。先生方に温かく迎えられ、学事日程と教育計画について詳しく説明してくれた。テコンドーの先生の写真を見せてくれたのだけど、ふと後ろを見ると日本語に翻訳された韓国の著者の本や韓国語で書かれた本も沢山置いてあった。いきなり他国にある韓国学校を私が訪ねることが出来るとは、本当にありがたいことだった。

韓国学校を見学した後、ホストファミリーとお会いました。ホストは、30代女性の鈴木奈津子さん。ただ、奈津子さんは仕事で遅くなるとのことでお母さんが代わりに迎えに来てくれた。私は日本語が話せないの、お母さんとの対話に紆余屈折があったけれど、お母さんが身振りで説明したり紙に書いたり、色々と配慮してくれた。今にして思えば、日本語を勉強せずに行ったことが最大の後悔だった。日本語が話せたなら、ご家族に韓国の多様な文化について説明することが出来たのに、本当に残念だ。ホームステイは、日本の家の様子だけでなく定着した日本の家庭文化が直に感じられるもので、今回の旅行で最も記憶に残った。

次の日、奈津子さんと一緒に名古屋城へ向かった。名古屋城は名所だけあって、帰国後に日本の行ってみたいところの話をすると名古屋城へ行ったという友達が本当に多かった。名古屋市役所の前に位置する名古屋城は、入口から入った瞬間都市から抜け出したかのような美しい風景に入り込んでいた。韓国の宮廷と違って高く築かれた石垣が印象的だった。このような石を動かす方法と力の入れ方を博物館で経験したことがあるけれど、やってみると日本人の知恵を感じた。

名古屋城の次は、大須の商店街を見て回った。商店街の中には多くの神社があった。彩り豊かな浴衣と流行するファッションなど日本の文化が垣間見え、帰り道には日本三大観音の1つである大須観音があった。特有の朱色の姿が印象的だった。



ホストファミリーとの交流の後は再びホテルに戻り、夕食を頂いて後藤さんと合流した。扇子を扇ぎながら片手を高く振って私たちを迎えてくれたのが嬉しかった。「ありがとうございます」という言葉を何回も言えなかったのが、韓国に帰ってからの心残りになる。

ホームステイ終了後は、奈良へ移動した。奈良の史跡と宝物は韓国との関係が深いということを、後藤さんがバス車内で説明し、韓教授が通訳して下さいました。その姿を見ていると、胸に響いてくるものがある。また、試験日程で忙しいにも関わらず時間を割いて同行してくれた鈴木さん、石田さん、竹村さん、木村さんに感謝の気持ちを伝えたい。法隆寺、東大寺、平城宮跡、奈良公園などを見て回ると、韓国・慶州を思い出す。自然と調和した奈良は、心身を癒してくれる休養林のような場所だった。

帰国の前日、名大付属高校を訪問した。改築した後とあって設備も良かったけれど、学校のカリキュラムが印象的だった。自分で科目を選択して授業が受けられると言う点と、体育の多様な種目(バドミントン・水泳・剣道など)が学べるのは羨ましい。授業を見学しているとき、英語の先生から子供たちに生の韓国語を聞かせてやって欲しいと言われ、韓教授が韓国語と日本語を交互に話しながら子供たちに韓国語について説明していた。それを集中して聞いている子供たちの姿が可愛らしかった。

付属学校を訪問した後は、名古屋大学へ移動した。韓日合同研究セミナーの前に名大の図書館を訪問したのだけれど、図書館の research room, learning pods が印象深く、学究熱がこの設備を作らせたのだ。館内には、学生のための多様な空間が点在する。合同セミナーの後は名大の教授や大学院生も加わっての交流会が行われ、話を交わした学生ともフェイスブックで友達になることが出来た。韓国に帰ってからも、NAVERやフェイスブックを通じて交流を深めていきたい。今回の日本訪問は、素晴らしい出会いを肌で感じる事が出来た。再び機会に恵まれれば、ぜひ参加したい。

海外生活の余波が消えない暑さの中で、日本語が話せない私に海外教育現場調査に参加する機会に恵まれた。ワクワクしながらオリエンテーションに参加し、盛り沢山の内容を見て、調査への期待が徐々に高まった。今回の教育現場調査では名古屋韓国学校の訪問、ホームステイ、奈良文化遺跡の見学、名古屋大学大学院生との韓日合同セミナーなどが日程に盛り込まれた。

〔名古屋韓国学校〕名古屋市に位置する名古屋韓国学校は、韓国の教育部認可学校ではなく各種学校として韓国語教育ならびに同胞の活動が主となる学校で、少し目新しさを感じた。この学校では、言語教育と同胞活動を通じて韓国の文化を広め、他国で言語や文化が学べる場所としての役割を十分に果たしていた。

〔日本人とのホームステイ〕今回の訪問では、1泊2日の日程で日本人家庭にホームステイする機会があった。60台の村越さんは日立グループでコンピューター関連の仕事をしていて定年退職し、現在は日本の南山大学で古代史の勉強をされていて、韓国に対する関心の高い方だった。最初は言葉のやり取りに不安があったが、村越さんの方からある程度の意味疎通は可能で、日本の文化と韓国の文化に対する関心の高さについて話すことが出来た。ホームステイを通じて日本の家庭文化を理解することが出来たし、犬山城やトヨタ博物館、ナゴヤドームなどを見学して名古屋地区の文化を眺めることが出来た。日本で家庭に人を招待するのは簡単なことではないと聞いたけど、ホームステイを経験させて頂いたことに心から感謝している。大切な思い出として記憶に残る、貴重な機会だった。

〔奈良旅行〕奈良の街は、まるで韓国の慶州、公州、扶余を思い浮かばせるもので、しばし忘れていた歴史を見つめ直すきっかけになった。私たちよりも韓国の歴史を知っている日本の皆さんを見て私たち自身が恥ずかしくなった。今回の訪問を契機に、僅かながらも歴史に興味を持つようになり、本当に有意義な時間だった。今後、公州や扶余も行ってみたいと思う。



〔名古屋大学韓日合同セミナー〕スポーツ交流を通じ外国人と多様な活動に参加してきたけれど、海外の大学を訪問して交流するのは今回が初めてだった。名大付属中学・高校を訪ねて学校の施設や子供たちの授業に接してみて、授業以外の部分での付加的な部分にもかなり気を遣っているのが感じられた。多くの学生の発表を聞いたわけではないけれど、発表を通じ両国の学生たちが考えていることや視点を知ることが出来たし、文化の違いはあるけれど両国の20代の悩みの種や未来に対する心配事は似ているということが今回の交流を通じて感じられた。また、名大の色々な施設を見ることが出来たし、学生たちとの会話を通じて学業だけでなく入試や就職以外にも多様な活動にとっても積極的だという言葉も聞いて、それは我が国の学生にも必要なことだと思った。

5泊6日という短い時間ではあったけど、このように多くの体験をすることが出来た。色んな国を訪問したわけではないけれど、その国の先入観は体験してみれば消えることが分かった。出会いを通じて関心が生まれ、感心を通じてまた違うことを学べる時間だったし、本当に有意義で貴重な旅行だったと思う。

ウネさん また 会いましょう！！

名城大 柚田 玲衣



私は以前から韓国に興味を持っていましたが、韓国に行ったことはなかったので、今回のホストで出会ったウネさん (AMY) が初めて出会った同年代の韓国人でした。韓国語があまり話せずたどたどしい英語での会話は簡単とは言えませんでした。日本の生活や文化を知ってもらったり観光をしたりと、たくさんコミュニケーションのとれたとても濃い2日間だったと思います。本当に短い時間でしたが、日本での楽しい思い出を作ってもらえたならとてもうれしいです。私もさらに韓国に親しみを感じ、もっと韓国語などを勉強して、いつか韓国に行きたいと思いました。

今回、私は7月11、12日の2日間にわたる高麗大の交流団の方とのホームステイ、2日目の名古屋観光を通じて、大変貴重な経験をさせていただきました。我が家へ受け入れることとなったのは、歴史教育を専門とする女子でした。彼女とは、韓国語でいろんな会話をしました。私はこれまでに学んだ文法や単語を絞り出し、彼女の立場にたてば、わかりにくかった点多々あったと思いますが、優しく、そして、彼女が話すときには、分かりやすくゆっくり丁寧に話してくれました。翌日は、一緒に名古屋城や、徳川園、大須へ行き、コメダ珈琲で名古屋名物シロノワールを食べながら、彼女の高麗大の話や、家族の話などいろんな話をしてくれました。特に盛り上がったのは、彼女からの「韓国語には“눈”と発音して雪と目を表す言葉があるけど、日本語にはそんな言葉があるの？」という質問から始まり、それに対して私は、「日本語で“茶”という言葉は色を表す茶と飲み物のお茶を表す言葉があるよ。」と返事をしました。自国の言葉を他国の人に説明することも交流の中での話題としてはとても面白く、盛り上がるものだと感じました。それから一緒に記念写真を撮り、他の交流団の方々と合流し、食事をしました。私はこれまでに、これだけ大規模の日韓交流を経験したことがなく、はじめは、緊張と期待が



入り混じったドキドキした気持ちでいましたが、最後は、別れが惜しくなってしまうほどでした。

彼女と過ごした楽しい2日間は、あっという間に過ぎてしまいました。今回、このような経験をさせていただいたことを心から感謝すると同時に、今後も日韓の交流会に是非参加させていただきたいという気持ちでいっぱいです。また、今後さらに韓国語の勉強に力を入れ、もっともっと韓国語でのコミュニケーションをより多くの人ととれたらいいと思います。

한일관계가 좋게 되는 날이 빨리 올 것을 기대합니다 !

高麗大学の留学生を受け入れて

守山区 村越 稔

大学の韓国語の授業で先生から受け入れ照会の話があり、女房に相談して希望しました。体育専門の30歳になる大学院生で、見るかに屈強、明るい性格の黄君でした。名刺を交換すると彼は会社の重役をやっている。お父さんの作った会社で、韓国では私立大学生は学費稼ぎの仕事をしながらの学生が多い、とのことだが、話の内容から彼の家は裕福な家庭で恵まれているようである。

11日まず栄で食事をした。日本語は「お水をください」を言える、他に少しずつ教えて自分も韓国語の勉強をした。12日はお天気もよく、どこに行きたいか聞いたらトヨタ博物館とナゴヤドームとのこと。時周的にもっと見学できるが、名古屋城はコンクリート建てでつまらないので、自分の好きな犬山城に案内した。駐車場からお城に向かうと横に体育館があり中から掛け声が聞こえ、黄君は何やっているか見たい、と言う。中に入って聞いてみると犬山市周辺の4つの市町村の中学校卓球競技大会だった。今まで何度もここを通過して体育館があるとは気がつかなかった。さすが体育教師である。

犬山城は日本の城の中で - 天守閣から「絶景かな」が楽しめるすばらしい城である。どこの城も最上階は部屋になっていたり、金網で覆われており、オープンエアーを楽しむことができないので現代の建物とあまり違う感じがしないが、犬山城は本当の天守閣という感じがする。

トヨタ博物館では黄君は熱心に写真を撮っていた。日本では若者の車に対する人気下がって来ているのに対し、韓国ではこれからなのだろう。

次にナゴヤドームに行った。ちょうど対広島戦をやっており、輯コンビニでチケッットを買っておいた。でも試合が平凡で、黄君は1時間ほどで「もう出よう」となった。この辺は韓国らしい。もっとも自分は野球にあまり興味なく、義理で付き合っているのを知っていたからかもしれないが。

名古屋と言えば熱田神宮もあるが、30年前、韓国の会社との技術提携でコンピューター技術を教えていたとき、休日奈良の観光に連れて行った。法隆寺から興福寺まで順々にお寺を巡り、最後に春日大社に行った。参拝方法をやって見せたが、皆遠響きに見ているだけ。そのうち一番親しかった延世大学出の金君が寄って来てささやいた。「韓国人は神社の参拝を禁止されています」すぐ靖国だな、と気付く「申し訳ない。帰ろう」黄君にも気を遣い熱田には行かなかったが、彼は前に東京に行った時の話をしてその内容から神宮外苑だと分かったので、この件を聞いたら現在は特にそのような制限は無い、とのこと。

自分は8月ソウルの慶熙大学校に短期留学する。高麗大学が近いらしい。図書館に行きたい、と言ったら学生証がないと入れない、とのことで、帰国後彼から案内します、というメールが来た。16日に案内をお願いするレスを出した。今から楽しみである。

韓国語は初歩のままだというのに、今回思い切って高麗大生のホストをつとめることにしました。その訳は、今回のホームステイが1泊2日と短い上に、私より韓国語ができる友だちや留学経験のある娘さんなどが「私たちが、ずっと応援するから大丈夫だよ！」と太鼓判を押してくれたからです。

さて、訪問団来日の日、なんと台風が日本に近づき、果して飛行機が飛んでこられるかな！？とヒヤヒヤしましたが、足の早い台風であつと言う間もなく東の方に去って行き、安心しました。そして夕方5時、名古屋韓国学校に行き高麗大の大学院生である李海京さんと出会いました。明るくて知的な印象の女性でしたが、日本は初めてで日本語もできないとのことでした。

自宅に帰って早速、夕食を準備しました。夫と3人の応援団、ヘギョンさん、そして私の6人で囲んだテーブルには、うなぎに名古屋名物の味噌カツを出しました。



彼女は出ている料理を口にするたび「オイシー、オイシー！」を連発、満面の笑みで喜びをあらわしてくれました。

この夜、応援団の岡本弘恵さんまじえて夜遅くまで話が弾んだのですが、そこで私たちが「エッ、本当なの！？」と驚いた瞬間がありました。

彼女は、自分は主婦で、夫も娘もいるとのこと、その娘はもう6年生になっていると話してくれた時です。私は岡本さんと「韓国の主婦は6年生の娘がいても大学院に通うんだ。本当に勉強家だね！」と感じたものです。

翌日は、この日応援団、会の事務局の後藤さんの案内で、名城犬山城に行きました。そこで出会ったのが全員忍者の服装でキメているマニア集団でヘギョンさんは、その真中に飛び込みポーズを決めてくれました。その後は天守からの眺望を楽しんだり、成田山での大護摩供養の見学などして名古屋へ移動、夕方からはホームステイした高麗大生とホストなど20数人が一堂に会しての交流宴席でした。実はこの日、集まっていた人たちの中で相手の国の言葉を自在に話せる人は、2～3人しかいなかったのですが、全員がカタコト混じりで一生懸命に対話し、場の雰囲気は最高に盛り上がっていました。

私はヘギョンさんのこぼれるような笑顔を見ながら「やっぱり日本人と韓国人はこれだけ仲良くなれる、隣人同志なんだ。ホストを引き受けて良かったわ！」と思いました。最近、日韓関係が冷え込んでいるといわれる中で、私自身の足も、このところ韓国から遠退いていましたが、なるべく早いうちにソウルに行きヘギョンさんの家族にぜひ会ってみたいものと考えています。

高麗大学生との交流・奈良旅行

2014年7月13日と14日、日韓市民ネットワークさんに所属する友人から招待を頂き、高麗大学の学生と一緒に1泊2日の奈良旅行に参加させて頂きました。私は1年間韓国で語学留学をしたのですが、帰国してから1年が経っていたこともあり、久しぶりの日韓交流と小学校以来訪れる奈良にとってもワクワクした気持ちで参加をしました。今まで日本の仏像や青磁器など、古来から日本と朝鮮は交流があり今でも文化財として残っていることや、日本の植民地時代から解放そして近現代の日韓関係について高い関心を持っていましたが、現地での日韓市民ネットワークの皆さんによる説明を聞いて初めて「奈良」という地域と朝鮮との深いつながりを知り、とても印象に残りました。この4年間韓国語を勉強したり韓国（朝鮮）の歴史を学ぶ機会が多かった為、改めて「奈良」という漢字が朝鮮系の漢字である説明を聞いて「確かに！」と新た

な発見が出来たり、仏像などを見学しながら小学生の頃は感じなかった日本と韓国（朝鮮）の「つながり」というものを深く感じる事ができました。

最近歴史認識の違いや日韓両方の政治の方向性の違いから日韓関係が悪くなり、韓国を訪れる日本人観光客の人数も減っているという残念な状況となっています。しかし今回の旅のように、学生だけでなく幅広い世代がお互いの国を訪れたり、お互いの国のつながりそしてお互いの文化の交わりを学ぶことで、嫌悪感よりも「つながり」を意識した関係になることを心から願います。また私自身も日本と韓国の交流そして両国についての勉強を深めようと改めて思う機会をくださった、日韓市民ネットワークの皆さんと高麗大学の教授の方々、学生の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

「現在、日韓関係は最悪の状態となっています」後藤代表のこんな挨拶から始まった高麗大学訪問団との夕食会。その数十分後には、先ほどの言葉を疑うほど、宴席は明るい笑顔と笑い声に包まれていました。その後、宿泊先のホテルでは、ホストファミリーとの別れの場に立ち会いましたが、溢れる涙を堪えられず、抱き合って別れを惜しむ学生たちの姿に胸を打たれました。日韓関係が冷え込む今日、日韓市民ネットワークなごやの意義を改めて感じた瞬間でした。

今に始まったことではありませんが、韓国人はこうである、日本人はこうである、という言説をよく耳にします。「国」という単位に基づいて個人にレッテルを貼る行為に対して、私はどうしても違和感を覚えざるを得ません。大きな意味では、韓国人、日本人によく見られる傾向というのはあるのかもしれませんが、しかしながら、例えば日本人だからといって、みんな勤勉で、（東日本大震災の時によく言われていましたが）モラルがあるとは限らないわけです。韓国人についても同様です。私も韓国に多くの友人がいますが、新たな友人ができるたび、（当たり前のことですが）新たな個性と出会い、もはや彼らを「韓国人」という一つのカテゴリーでまとめることはできません。

頭から「韓国人・日本人はこうだ」と決めてしまうのは、ある意味でとても「楽」なことです。ただし、同時に非常に危険なことでもあると考えます。レッテルを貼るという行為は、「個人」としてその人を知ろうとする機会を自ら消去することでもあるからです。さらに、そのレッテルが否定的な内容をはらむとき、「個人」が不在のまま相手への憎悪だけが膨らむ結果にもなりかねません。今、アジア諸国に関する「保守

系」の人たちの議論を見ていると、そこに「個人」としての人間がいないまま、虚しく感情的な言葉が飛び合っており、誠に残念な気持ちになります。だからこそ、市民交流が重要なのだと考えます。同じ市民として、つまり、人として向き合うことで、血の通った人間関係が生まれます。その上に、国と国の友好関係も実現しようと考えます。先述の宴席、ホテルでの光景には、「人と人」の交流があったのだと確信しています。

2000 年前の奈良に思いを馳せます。当時、半島から渡ってきた渡来系の人々が中心となって、奈良という異国の地に都を造ったこと。そこに半島文化と類似しているながらも、独自性を持った文化を築いてきたこと。これを可能にしたのは、日本と朝鮮半島の人々の間の「血の通った交流」だったと想像します。自分たちの価値観を相手に押しつけるだけの交流では、奈良に豊かな文化がもたらされることはなかったのではないのでしょうか。そういう意味でも、奈良は日本と朝鮮半島の交流を考える聖地的場所であり、現代の我々に多くのメッセージを伝えてくれるものと思います。

今回、そんな奈良の歴史と文化を韓国の学生と共に学べたことを大変うれしく思います。また改めて草の根の市民交流を続けていくことの重要性を実感しました。そして、より多くの高校生、大学生に日韓市民ネットワークなごやの活動を紹介し、若い世代が市民交流の担い手となっていけるよう、今後とも微力ながら貢献して参りたいと思う所存です。末筆ながら、今回の高麗大学訪問団の交流事業を企画・運営していただいた後藤さんをはじめとする事務局の皆様我心より感謝を申し上げます。





こちらでは会員の皆様の声を載せております。
皆様から、「会員みんなに伝えたい!」「韓国のが好き!」は勿論、「こんな旅行して来た」等、日々の暮らしの様子などの皆さんの声を是非、お送り下さい。

韓日親善のために

山田 雅 樹

「山田さん、7月に名古屋へ行くんですけど、会えますか?」

3年前、我が家にホームステイしに来てくれた、高麗大学校の金慈中君からの、フェイスブックでのメッセージ。これは会わない理由はない。日程を調整し、栄で合流した。本当は家に招待したかったのだけど、母親が体調を崩してしまったため、栄で名古屋めしを堪能することにした。味噌カツや名古屋コーチンも美味しかったが、慈中君は「赤味噌ラガー」が気に入ってくれたようだった。あまり長く話すことは出来なかったけど、名古屋で再会出来たのは嬉しいことだった。彼の目に、名古屋の街はどう映ただろうか。去年はソウル、今年は名古屋で再会した。来年は、僕がソウルへ行かねば。天安にも帰りたいし。

その10日後、韓国から大学生十数名が名古屋韓国学校にやってきた。彼らは「國人(국인)」と呼ばれ、国内外で交流や文化発信、就業支援などを行っている。数年前から韓国学校を訪れるようになり、特別授業を行ったり韓国料理や韓国の遊び、書道、絵画、



K-POP が体験出来るイベントを開催している。昨年も来てくれた学生もいて、「お久しぶりです」と握手を交わせたのは嬉しいことだった。

この中で書道体験コーナーに入ると、日韓両国で使われる諺や四字熟語の手本が掲示されていたが、僕は他の言葉が書きたかった。さて、何を書こうか。その時、「彼らは何のためにここに来ているのだろうか?」と考えると、すぐに筆を走らせることが出来た。その言葉は「한일친선을 위하여(韓日親善のために)」。韓教授や金慈中君をはじめとする高麗大の皆さん、國人の皆さんもそのために来てくれているはずだ。とても人様に見せられるような出来栄ではないが、そんな彼らへの感謝を込めて書いてみた。韓国の文化を発信すると同時に、名古屋の文化も実感してくれた。また来年も名古屋に来てくれると思うし、韓国での再会も楽しみにしたい。韓日親善のための活動は、絶対に終わることはない。僕はそう思っているし、彼らもそう思ってくれているはずだ。



(会報 70 号・高麗大生の感想文は、全て 山田雅樹氏 が
翻訳していただきました。カムサハムニダ! 蜜穂)

日韓市民ネットワーク・なごやのホームページが、リニューアルされました !!

新アドレス <http://home.m00.itscom.net/nikkan/index.html>

武井一先生のご尽力により、貴重な活動記録や多彩なメニューも追加されています。
ぜひ一度ご覧になり、お楽しみいただけましたら幸いです。
掲示板への投稿も、お待ち申し上げております。